

欲望・貨幣・商品・商人

「欲望の社会システム学」のための 欲望論用語集序説

黒石晋

Susumu Kuroishi

滋賀大学 経済学部 / 教授

『基本意図』「人間の社会を動かし、人間の歴史を営んできた基本的なエネルギーは、人間固有の〈欲望〉である」、という「欲望論」の立場から、これまでの社会理論およびシステム科学を再検討し、文理融合の新しい「社会システム学 Socio-systemics」の構築をめざす¹⁾。

『本稿の位置』筆者はここ15年にわたり遅々として前述した作業を進めてきたが²⁾、その基本概念の部分が固まってきたので、ここで紙幅の許すかぎりその基本用語・専門用語を「用語集」の形で整理し、広く批判・評価を得んとする。本稿は中間的成果であり、それもいまだ一部にすぎないが、議論のための資源としてあえて公開しうる形にするものである。

『アプローチ』欲望論的社会理論のひとつの到達点というべき、ドゥルーズ＝ガタリの二つの代表的著作（AOおよびMPと略記、詳細は下記）をシステム論の論考として独自の視点から読み解き³⁾（これを「本欲望論」と記す）、さらにこれを最新のシステム科学の視点から新たに再構成し（これを「システミックスsystemics」と仮称する）、上記両者の結合・融合をはかる。

その際、ドゥルーズ＝ガタリ用語・言説をすべて受け入れひたすら解釈する、という訓詁学的な姿勢を廃し、検討の結果として、別のより適切な用語と置き換えたり、新たな概念を加え補ったり、構成を変えるなど、適宜修正変更や独自の展開をおこなう。

1) 「社会システム学 Socio-systemics」の名称や意義などについては、今田高俊・鈴木正仁・黒石晋編『社会システム学をめざして』（シリーズ「社会システム学」別巻）ミネルヴァ書房、2011年を参照。

2) 拙著『欲望するシステム』（シリーズ「社会システム学」2）ミネルヴァ書房、2009年。

また、見出し語や欧語からの邦語訳語の選択、あるいは内容の説明にあたっては、「文理の融合」をめざす「一般システム理論」の精神にのっとり、様々な分野において理解が共通化できるようつとめる。

『基本文献』ドゥルーズ＝ガタリの二つの代表的著作は以下の通り。

AO : Gilles Deleuze et Félix Guattari, *L'Anti-Œdipe: Capitalisme et schizophrénie*.

Les éditions de minuit, 1972.

(=1986, 市倉宏祐訳『アンチ・オイディプス』河出書房新社。以下「市倉訳」と略記)。

(=2006, 宇野邦一訳『アンチ・オイディプス』河出書房新社(文庫版))。

MP : Gilles Deleuze et Félix Guattari, *Mille Plateaux: Capitalisme et schizophrénie*.

Les éditions de minuit, 1980.

(=1994, 宇野邦一ほか訳『千のプラトー』河出書房新社)。

II エネルギー、欲望と欲求

エネルギー【energy】①〔自然科学〕系が〈仕事work〉をする能力の総称、自然科学で最も基本的な中心概念。力学的概念としての〈仕事〉は一般に〈ジュール[J=N×m]〉を基本単位とする物理量で表現されるが、初歩においては「kg重m」等の直感的単位も用いられる。その他、分野ごとにkWh(電気工学)、 $\frac{1}{2}mv^2$ (キネティックス)、cal(熱学)、 eV (素粒子物理)、 $h\nu$ (量子力学)、 mc^2 (相対性理論)、…等、さまざまな形・さまざま

な単位で物理・化学現象のあらゆる領域にあられるが、これらは基本的に同じものである。しかも、それらはエネルギー保存則によって厳密に統合される。

②〔心的エネルギー〕初期フロイトの用語(psychische Energie)。ヒトの心の中の無意識の層位(=エス; das Es)に潜み、人間を行為させる未分化な原動力で、〈欲望〉ともいう(⇒欲望)。フロイトは、ヒトの心的エネルギーを物理学のエネルギーのように保存される量として考えようとした。すなわち、心的エネルギーは抑圧されても減衰したり消え去ったりせず、心のどこかにわだかまって心的病理をもたらす。

なお、フロイト自身はやがて大きく性欲理論へ傾いてゆき、本来「欲望一般」を意味するラテン語の〈リビドー libido〉も「性欲のエネルギー」の意味で用いられるようになる。性欲理論では精神分析には何らかの意義があるにせよ社会理論にはまったく寄与しえない⁴⁾。よって本欲望論は、性欲に偏ったこのエネルギー論を採用しない。心的エネルギーをあくまでも「欲望一般」の意味で用いる。

③〔欲望論〕本欲望論は、フロイトの「心的エネルギー」すなわち〈欲望〉を人間の根源的な原動力とみなし、これに立脚することで人文・社会現象を統一的に再解釈し再編しようとする試みである。それは、物理学のあらゆる分野がエネルギー概念によって統一されることに範をとった、人文・社会科学の試みである。

心的エネルギー【psychic energy】フロイトの用語。
⇒エネルギー②

3) ドゥルーズ＝ガタリの基本構想が、I. プリゴジンや H. ハーケン、あるいは M. アイゲンなどによる、現代の非平衡・非線形システムへのアプローチと近親性を示していることは、つとに浅田彰氏によって指摘されていたことである。今村仁司・浅田彰「対話・ドゥルーズ＝ガタリを読む」『現代思想』1982年12月号、228頁。

4) 性欲理論は、人間よりもむしろ動植物の容姿・行動を説明する上でより有効であると思われる。たとえば鳥たちの奇妙な容姿や求愛行動、昆虫たちの整然とした社会行動、被子植物の妖艶な花や魅惑的な果実…。これらはいってみれば「遺伝子の性的欲望(リビドー)」がもたらした進化の所産である。

欲望【desire／仏désir／独Verlangen⁵⁾／希
epithymia⁶⁾】(opp.欲求)人間の無意識の中に
潜む、人間の基本的な心的エネルギー。本欲望
論の基本概念。現代における欲望の思索の系
譜は、フロイトの〈心的エネルギー〉に始まり、
ユング、ラカン、ジラール、…etc.…らによって
様々に彫琢され、ドゥルーズ＝ガタリによって集
大成された。

欲望は、定型の〈欲求need〉とは異なり、未定型
で未分化の、そして無意識のものである。した
がって、欲望のもとで人間は「何か(something)
が欲しい、でも何が欲しいかわからない
(unknown)」という衝動を抱く(⇒何か
something unknown)。無意識の奥底から湧
き上がってくるこの欲望にpushされ、人間は否
応なく突き動かされる。これが欲望の行為であ
る。そして欲望の偶発的な発出による行為がと
もかく先行し、その意味や目的等は「あとづけ」
される。こうして心中に湧きおこった欲望は、ヒ
トにおいて「欲望→発出→快楽→付加→(エピ
グラム記憶)」の順に発現し作動する。欲望は
まず発出し、しかるのちに何ものかになるのであ
る。ゆえに欲望は因果(目的－事前選択)の概
念ではなく純粋に過程の概念と解すべきもので
ある。この点、欠乏動機による合目的な〈欲
求〉とまったく異なる。このことは「必要への欲求、
不必要への欲望」と表現しうる。未知のものは
不必要なものだからである。

なお、欲望は動物的本能とは異なり、人間のみ
に固有の心的エネルギーである。また逆に人間
には必ず欲望がある。したがって人間は〈欲望
するヒト homo desiderans〉と定義しうる。

発出【emission, emanation】①〔自然科学〕自然

界で物質がエネルギーを放出する現象一般を
いう。なお、生理学では動物のオスが射精する
ことをemissionという。

②〔欲望論〕(opp.充足／抑圧)欲望のエネル
ギーがほとばしり出ること。つまり未知の新奇な
行為を導く欲望の作用。逆に欲望の発出を抑え
ることを抑圧という。発出は欲望の高まりによっ
て生じ、何も欠乏していないところにも作動する。
これらはヒトにおいて「欲望→発出→快楽→付
加→(エピグラム記憶)」の順に生起する。なお
欲求の発動とその作用を充足という。欲望の発
出はエネルギーの発出としてヒトの精神や身体
の動きを伴う。これがヒトの〈行為〉である。

③上記②と同様の事態(欲望の発出)をドゥル
ーズ＝ガタリは「欲望の生産」あるいは「欲望する
生産」と呼ぶ。また、逃走漏出(fuite)と形容さ
れることもある。(opp.獲得)

快楽【pleasure／仏plaisir／独Lust／希
hedonē⁷⁾】(opp.満足)欲望が発出した際、行
为主体にもたらされる心的な解放感。多くの場
合、愉悦感・達成感などの正の感覚のほかに嫌
悪感・後悔感などの負の感覚を伴う。行為の是
非に確信がもてないからである。欲求が充足さ
れたときの満足感とは似て非なる概念であるの
で、両者は理論的に峻別しなければならない。
フロイトによると、心的エネルギーすなわち欲
望は無意識の〈エス〉のレベルで快楽原理
(Lustprinzip)にしたがって挙動する。欲望は、
基本的にこのように無意識の領野に発するので、
自覚的に選択・制御できるとは限らない。した
がって快楽は意識の効用や自覚的満足とは
まったく異なる、欲望論の独特の概念である。
古代エピクロス派の基本概念でもあった。

5) 独語ではBegierdeやWunschを用いることもある。
とりわけBernd SchwibsによるAOの独訳
(Suhrkamp, 1977)ではWunschとなっている。

6) επιθυμία.

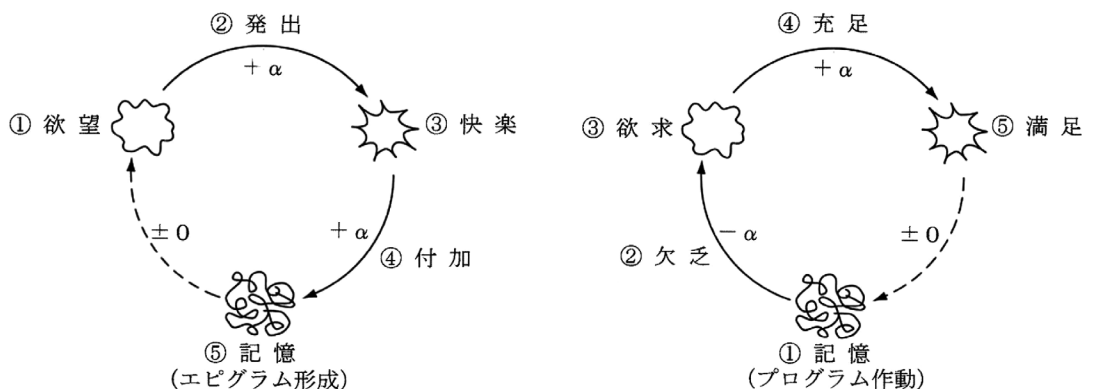
7) ἡδονή. 派生語にhedonism (快楽主義)。

付加【addition】(opp. 欠乏充足) 事前には未知の不条理な行為(欲望の発出)が事後にもたらす新奇な記憶の増加分(+ α)。行為の結果として新たに追加された記憶。事後選択され生存・存続すれば情報として蓄積され、事後のエピグラムを形成する。発出と合わせて「発出付加」ともいう。

欲望するヒト【homo desiderans】「人間は無意識の欲望を抱く存在である」、という新たに発見された人間観に立脚する、人間への標語。19世紀までの人間観を支配したデカルト的「コギト」、すなわち「われ思う、故にわれあり」の立場(意識の人間観)は、homo sapiens(知性のヒト)の命名にあらわれている。意識(特に自己意識)や知性が人間と他の動物を分かち基準とされたのである。これに対し、20世紀以降、特にフロイトによって「われ欲望す、故にわれあり」の人間観(無意識の人間観)が発見されデカルトの人間観に痛打を浴びせた⁸⁾。人間は無意識によってそれ

と知らずに操られる操り人形だったのである。この人間観をhomo desiderans(欲望するヒト)という。

欲求【need／仏besoin／独Bedürfnis】(opp.欲望) 欲望の類義語にして対義語。プログラムされた既定の欠乏動機に促され、その欠乏の充足を求めようとする心的な営み。欲求のもとで人間は「あれ(既知のもの)が欲しい」という具体的な衝動を抱く。こうして欲求は必要なものを求める動機にpullされ、「(プログラム記憶)→欠乏→欲求→充足→満足」の順に作動する(もともと知っていた欠乏の充足にすぎないから、既定性の確認にすぎず、新奇性の付加はない)。逆に欲望の対象は未知であり無定形である。このことは、「必要への欲求、不必要への欲望」と表現しうる。ドゥルーズ＝ガタリはこの欲求の作用を「獲得acquisition」と表現した(欲望の作用は「生産production」)。



両者は形式的に類似しているが、その含意は大きく異なる。何も欠乏していないところ(±0)に発出し(+ α)、結果として+ α の付加をもたらすのが欲望の作用(新奇性の付加)であるが、欠乏(- α)から始まってそれを充足し(+ α)、結果として±0に至るのが欲求の作用(既定性の確認)である。欲望は開拓し、欲求は定着させる。なお人間の文化文明は、さかのぼればすべて欲望による新奇性の付加の産物である。

図II-1 欲望の発出(左)と欲求の充足(右)

⁸⁾ 鈴木 晶「フロイト——無意識の発見者」

『無意識の発見』(岩波講座「現代思想」3, 1993年)5頁。

無定形の欲望がエピグラムによって既知化され定形化すると、次回以降、プログラムされた欲求に転化する。つまり欲求は、かつての欲望が分化し具体化した、欲望からの派生物である。ドゥルーズ＝ガタリはいう：「欲求に支えられているものとして、欲望があるのではない。逆である。欲望から派生するものとして欲求があるのである」(AO, 市倉訳41頁) と。

欠乏 [lack / 仏manque / 独Mangel] (opp.付加)
既知のプログラムに組み込まれた欲求されるべき要素のうち、現実を満たされていない不足分(−a)で、それを求めることが目的となるような具体的対象。目的。相対的欠乏(既知の欠乏)。逆に、プログラムそれ自体が欠けている欠乏(未知、無知)を絶対的欠乏という。絶対的欠乏のもとでは、実は具体的欠乏は存在しない。そして知らないことは欲求しえない。知らないこと(something unknown)を目指すのは欲望だけである。

充足 [fulfillment] (opp.発出) 既知・既定の欠乏をみたそうとする欲求の作用。結果として主体に満足をもたらすが、その満足は既知・既定の満足であって未知の新奇性を付加することはない(±0)。欠乏→欲求→充足→満足の順に作動する。

満足 [satisfaction, gratification] (opp.快楽) 欲求が充足された際の心的な充実感。すでに知っている欠乏への充足による、すでに知っている満悦(既定性)とその確認。
経済学でいう<効用>は、経済主体によってあらかじめ知られている量であるから、快楽(欲望の

発出)ではなく満足(欲求の充足)であることがほとんどである。

新奇性と既定性 [novelty and banality] 行為がなされたとき、そこに含まれるまったく知らないこと(新奇性ないし未知性)とすでに知っていること(既定性ないし既知性)。欲望の行為は新奇的・未知的であり、欲求の行為は既定的・既知的である。サイバネティクスのV. トゥルチンによれば、脳内のモデル(プログラム)を改良する新しい経験(学習)は人間にとって快楽(pleasure of novelty)として受け止められるという⁹⁾。

生産と獲得 [production and acquisition] ないもの、未知のものを生み出そうとする新奇な働きを生産productionといい、あるもの、既知のものを得ようとする陳腐な働きを獲得acquisitionという。いずれもドゥルーズ＝ガタリの用語で、生産は欲望の作用、獲得は欲求の作用である。

プログラム、エピグラム [program / epigram] システムの作動を事前選択的に定めている一連の指令的な情報のストックをプログラムという¹⁰⁾。これに対し、システムの作動した新奇な結果から、事後選択的に記憶され系統的にストックされた教訓的な情報をエピグラム(あと知恵)という¹¹⁾(⇒選択)。プログラムは欲求(目的)とその充足を事前に既定しており、エピグラムは欲望の発出と新奇な記憶の付加によって事後に形成される。プログラムは目的論的であり、エピグラムは結果論的である。

いずれも経験(すなわち行為の記憶)を要素とし、それらが構造的に配置されたものからなるが、

9) Valentin Fedorovich Turchin (1977) : *The Phenomenon of Science*. Columbia Univ. Press. (=1979) 鎮目恭夫・林一訳『人間の現象としての科学』岩波書店、第1巻115頁。

10) 理論社会学者の吉田民人は、社会秩序は法則よりも規則によって成立しているとして、プログラムを解明することこそが社会秩序の解明になるという。

11) “epigram”の語は通常「警句」「寸鉄」といった意味であるが、ここでの用法としては、まったく“program”の対義語とする。programが「前書き」であるのに対して、epigramを「後書き」と位置づけるのである。

その多くは意識されざる無意識の中にある。行為の繰返しiterationを想定する理論では、前行為のエピグラム記憶が後行為のプログラム指令に転換することを考慮すべきである。この意味で、現在のプログラムとは結局、過去のエピグラムの集合体にすぎない。たとえば、現在の遺伝情報(プログラム)も、過去の変異と事後選択の記憶(教訓)の集合すなわちエピグラムにほかならないのである。

選択【selection】〔進化論〕ダーウィン進化論の主要概念であるが、エヴォリューションистを自任する吉田民人はこれを彫琢して「事前選択と事後選択」、「主体選択と自然選択」を峻別した¹²⁾。これらを掛け合わせると、次の4種類の選択類型を導出しうる：

(1) 事前主体選択；(2) 事後主体選択；

(3) 事前自然選択；(4) 事後自然選択。

進化という現象において、(3) は本来不可能だが、今西進化論は事実上これを認めている。

欲望の行為は、「愉悦感／嫌悪感」という快樂の評価とともに事後選択され、エピグラムとなって蓄積していく。これが次回以降の行為において事前選択のプログラムとして作動するのである。

III 欲望の特質

光と闇(欲望の)【brightness vs. darkness】 欲望には光と闇がある。うまく使えば恵みをもたらす、用法を誤れば惨禍をもたらすが、それは「エネルギー一般」の性質に由来するもので、これは

人類創生の火の神話にしても、火薬や石油、原子力についても、そして欲望についても同じことである。欲望もエネルギーの一種(心的エネルギー)として、ヒトに文化文明をもたらすがそれを破壊もする。

逆に、欲望それ自体は善でも悪でもない。それは使われ方ひとつにかかる。多くの宗教は、ヒトの欲望の暗部を恐れ戒める。欲望に悪の可能性があるのは事実だが、それをすべて悪と決めつけて抑圧するのはかえって社会病理を招くことにもなる(⇒抑圧)。欲望はヒトの宿命であり、うまくつきあいながら適度に流し続けるほかに道はない。

何か、何か未知なるもの【something unknown】

未分化な欲望の始原的な、かつ一般的・無限定な希求対象。未分化な欲望が、未分化なまま希求し志向する、抽象的な対象である。

「何か」という感覚は、人類がサルからヒトへと進化したとき付加された、もっとも重要な観念のひとつで、それによってヒトは「何か」を恐れ、「何か」を求めるようになった(サルは未知の「何か」を恐れ求めはしない)。そしてこの「何か」こそが広い意味での〈一般性〉の観念をもたらす。それを「神」と呼ぶ民族もあるし、「科学」あるいは「真理」と呼びなす民族もあるが、とにかくヒトは限りなくその「何か」を求め続ける¹³⁾。

一般的・無限定な「他者」、すなわち「誰か somebody」もまた「何か」の一種であり¹⁴⁾、ヒト固有の観念である。そしておそらく「誰かに見られている」という感覚こそがヒトに〈公共心〉の観念をもたらす。統合失調症は人類とともにある

12) 吉田民人「社会科学における情報論的基礎」、『情報と自己組織性の理論』東京大学出版会、1990年、139-141頁。

13) 数学において、未知の数を考えこれをたとえばxとおく。この手続きが単なる算術を越えた「一般性」に大きく貢献していることは明らかだろう。

14) この「誰か」、すなわち「一般化された他者」を、フランスの精神分析家ラカンが〈大文字の他者〉と呼ぶ。大文字で特記される唯一の一般的他者、それはヒトを唯一神の観念へと導く。

宿命的な精神疾患¹⁵⁾だといわれる。この病はおそらく「誰か」「何か」という人類固有の観念に由来するもので、これに過度にとらわれた自己の症例であろう^{16), 17)}。

何か、何かほかのもの【something else】貨幣的欲望に典型的にあらわれる動機。確かにヒトは貨幣を欲望するが、最終的に貨幣そのものを欲望しているのではなく、実は貨幣以外の「何か」を欲している。(貨幣以外の) 何かほかのものを欲しているゆえに貨幣を欲するのである。このような貨幣を経由してほかのものを欲望する、未分化で貨幣的な欲望の対象を「何かほかのもの」という。

抑圧【repression／仏refoulement／独Verdrängung】

①〔フロイト〕原義は「押しやる、押しのける」。フロイトは、個人が「思い出したくない」と抑制的に働かせる無意識裡の内部心理が、実際に経験を無意識へ沈潜させると考え、これを「抑圧」と称した(心的外傷によるとみられるヒステリー患者からの推察)。このフロイトの「抑圧」は、個人の内的機制に限定されるもので、社会的な欲望論を展開する上では狭すぎて受け入れられない。

②〔欲望論〕本欲望論では、欲望の発出を内外から押しとどめ押さえつけようとする、欲望への対抗作用の全般をさす¹⁸⁾。その際、欲望の主体・

客体が個人であるか集団であるかを問わない。

③〔社会的抑圧〕ソ連型社会主義は、まったく上記②の意味での「欲望の抑圧体制」であった。抑圧が個人単位でなく国家的スケールで、社会の内外から行われたにすぎない。しかも、それが理想を目指す崇高な使命感のもとで行われたのである。実は、資本主義のもとで労働者が搾取されることが問題のではなく、労働者が抑圧されることが問題だったのだ¹⁹⁾。ソ連型社会主義はこの点を見誤り、抑圧された労働者を新たな、より巨大な別の抑圧体制に置き換えたにすぎなかった。すなわちソ連型社会主義は、人間を〈労働するヒトhomo laborans〉と決めつけ²⁰⁾、禁欲的労働を強制した。その結果、抑圧された欲望は社会のさまざまな箇所にもぐりこみ割り込んで、多くの社会病理を招来した。

コンプレックス【complex／仏complexe／独Komplex】

①〔フロイト派〕フロイトの用法では、事実上〈オイディプス・コンプレックス〉(男児が母を愛し父を憎む性愛的な無意識)をさし、すべての人間があまねく共有する本源的な心的傾向²¹⁾だとされる(人ごとに個性がない)。つまり欲望はオイディプス・コンプレックスに従うものとされる。フロイト派精神分析の基本に置かれるが、ドゥルーズ＝ガタリはこれを批判する²²⁾。オイ

15) D. ホロビン(金沢泰子訳)『天才と分裂病の進化論』新潮社、2002年。

16) 長井真理によると、統合失調症の顕著な症状は「誰かにさせられている」「誰かにつづぬけである」という体験(させられ体験、つづぬけ体験)にあるという[木村敏「分裂病と他者」弘文堂、58頁、178-9頁]。そしてこのときの「誰か」は決して特定できない他者なのである。このように不特定の「誰か」(それは決して具体的な人物ではない)が自己へ介入してくる実感、そしてそれへの恐怖や怒り。これが統合失調症の顕著な特徴である。

17) 前近代においては、「誰かに見られている」「誰かに命令されている」という統合失調的感覚は「神にお見通しである」「神のお告げである」「お天道様が見ている」などと解され、異常とは

みなされなかった。19世紀のヨーロッパに統合失調症が激増したといわれるのは、けだしその「神」が否定されたために「誰か」への強い恐怖がひとびとを襲ったからである。

18) 仏語圏の精神分析界では、フロイトの「抑圧」にrefoulementの語を当てるのが常道である。だがこれとは別にrépressionの語もあり、英語圏でrepressionがフロイトの「抑圧」の意味で用いられることとあわせて両語の関係は微妙である。ドゥルーズ＝ガタリはこの両語を自覚的に区別して用いており(40, pp. 134f.)、市倉訳ではrefoulementを「抑圧」、répressionを「抑制」と訳し分けている。一方refoulementに相当する語がない英語版では、refoulementを“psychic repression”、répressionを“social repression”と英訳している。

ディプス欲望はむしろ抑圧の結果だというのである。本欲望論においても欲望のオイディプス説を採用しない。よって以下の②の用法で用いる。

- ②〔ユング派〕フロイトと決別したユング (Carl G. Jung) が独自に展開した用法。あるひとの個人的経験の記憶が無意識の中で結びつきあい、その人に固有の「かたまり」を構成したもの。つまりエピソードの一種である。ユングのいうコンプレックスはその人の人格的個性を大きく担っており(人ごとに個性がある)、特にもっとも大きな「全体コンプレックス」が意識を析出し全体を統合したのが、その人の人格(自我コンプレックス)である。逆に、いわゆる「多重人格障害」(解離性同一性障害)とは、一個人の中に自我コンプレックスが複数個形成され(ひとつの自我によって統合されず)、それらが並立しつつ相互交代する症例だと理解される。

欲望する生産【the desiring production／仏la production désirante】①〔広義〕ドゥルーズ＝ガタリは欲望の一切の活動を「生産」ととらえる。このようにとらえられた欲望の活動を広く「欲望する生産」ないし単に「生産production」という(なお欲求の作用を「獲得acquisition」という)。ただし本欲望論では「生産」の語をこの意味では極力用いないこととし、代わりに**発出**(⇒**発出**

②) という語を用いる(以下の②の用法に限定するため)。ドゥルーズ＝ガタリはさらに、生産(欲望の作用)には(1)生産(受動と能動)の生産、(2)登録(分配と配置)の生産、(3)消費(享楽と不安と苦悩)の生産の3種があるという²³⁾。ここでいう「享楽と不安と苦悩の生産」とは、まさに**快楽**のことである。

- ②〔狭義〕たとえばパン屋にとってのパン、靴屋にとっての靴は、本人にとってそれが必要な使用価値ではなく、「何かほかのものが欲しい」ゆえに生産された交換価値にほかならない。このような「これが欲しいのではない、何かほかのものが欲しい」ゆえの生産を「欲望する生産」という。

IV 価値・貨幣・商品・商人

行為【action／独Handeln】欲望の**発出**によって主体が動かされること(フロイト)。あるいは**欲求の充足**のために主体が動かされること。意識無意識を問わない。また身体の行動のみならず精神の活動・情動をも含み、行動を伴わない後者のみの場合もある。たとえば夢や幻覚、空想や願望も行為に含まれる。その置かれる社会的文脈によって経済的行為(⇒**経済行為**)、社会的行為などと呼ばれる。

19) その意味で、従来「搾取」という左翼的観念によって硬直的に捉えられてきた勤労者の境遇を、「抑圧」という精神分析的概念によって書きなおすが、今後求められるのである。

20) F. エンゲルス『猿が人間になるについての労働の役割』1965(原著1867)年、大月書店。この草稿とそのタイトルは、人間を〈労働するヒトhomo laborans〉ととらえたことを示している。

21) 女兒の場合には「父を愛し母を憎む性愛的な無意識」をさし、〈エレクトラ・コンプレックス〉と特記されることがある。

22) ドゥルーズ＝ガタリはそもそも、フロイト派によってオイディプス・コンプレックスに従うとされてきた欲望を解放することを主張している。そして解放された欲望の典型的な発現体制として、資本主義と分裂病が位置づけられる。それが『アンチ・オイディプス：資本主義と分裂病』という書名(AO)の真意なのであり、本書が「精神分析批判の書」とされる所以である。

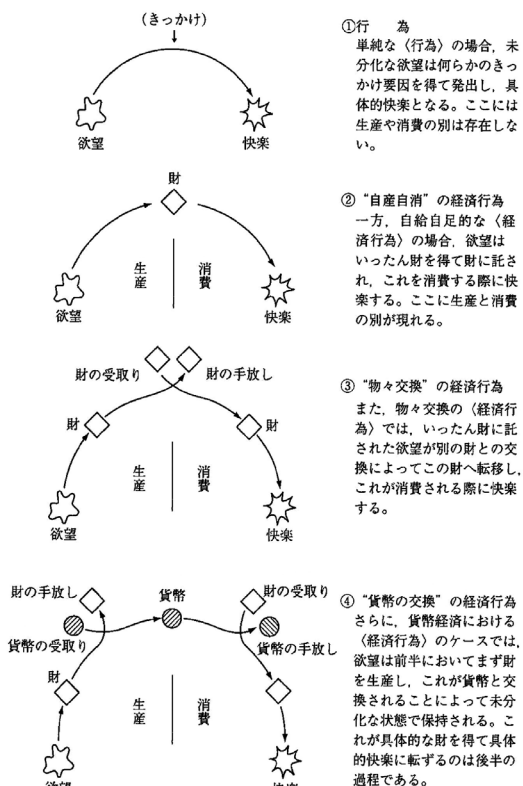
23) ドゥルーズ＝ガタリはいう、「だから、一切は生産なのだ。ここに存在するのは、生産の生産(受動と能動との生産)であり、登録の生産(分配と配置との生産)であり、消費の生産(享楽と不安と苦悩との生産)なのである。AO, p. 10、市倉訳16頁。本欲望論でこれを解すれば、さしずめ「欲望する生産→欲望する登録(貨幣)→欲望する消費」ということにでもなろう。

行為は目的を持つ場合(欠乏充足の行為・欲求の行為・意識的行為)と目的を持たない場合(発出付加の行為・欲望の行為・無意識的行為)とがあり、欲望論では特に後者が重要である²⁴⁾。なぜなら、欲望とは第一義的に意味や目的をもたぬ無意識の未分化なエネルギーで、欲望による行為は純粹に過程として欲望発出するだけの、不条理な行為だからである。ここでは、発出の原因や目的は存在しないか、あるいはきわめて些細なものでありうる。そして行為の意味や目的は事後選択的に(⇒選択)与えられるのである。

行為主体、主体【actor, agent】行為をおこなう単位。

社会学では事実上人間個体を意味することが多いが、シミュレーション手法などではまったく数学的・抽象的な単位をあらわすし、国家や企業などが行為主体として措定されることもある。古典的な行為主体は、行為の意味を自覚し、行為を意図的に事前選択する能動的な存在(自我；コギト)と措定されることが多い。だが現代的な欲望論でいう行為主体は「みずからが主体的判断をくだす主体的な主体」ではないことに留意する必要がある。欲望の主体は「欲望の発出によって理由なく行為する非主体的で不条理な主体」なのである。この「非主体的な主体」はフロイト的な「無意識という意識」に由来する。

経済行為【economic action】行為が経済財や貨幣を媒介として実行される場合、このような行為を特に経済行為と呼ぶ。欲望の亢進から発出・快楽に至る過程である点では通常の行為と変わるところがないが、欲望が財や貨幣、また商品等を経由しその形態を変転する点が特徴である。(1) 自産自消(自給自足)、(2) 物々交換、



黒石 晋『欲望するシステム』ミネルヴァ書房、58頁より。

図IV-1 経済行為の諸類型

(3) 貨幣交換の3つの類型が区別される〔図IV-1〕。(3) はさらに「貨幣による貨幣の商品化」という事態を派生する〔図IV-2〕。

図IV-1に見られるように、経済行為はそのいずれの類型においても「生産の局面」と「消費の局面」とに大きく二分しうる。ただし「登録の局面」を加え

24) 富永健一や作田啓一ら、パーソンズ行為論に強い影響を受けた社会学者は、〈行為〉を定義によって〈目的〉を含むものと規定している。それが動物にない人間らしい行為だということなのだ。

富永健一『社会学原理』岩波書店、1986年、第2章、および作田啓一『価値の社会学』岩波書店、1972年、3頁。

だが本欲望論では、このような行為概念を拒否する。

無意識の無目的な欲望の発出こそが人間の行為の原型だからである。こう考えれば、佐藤俊樹のいう「行為システム論の破綻」(佐藤『意味とシステム』勁草書房、2008年)は回避される。

た三分法をとる。この場合、財や貨幣に籠められた欲望のあり方を〈登録〉と呼ぶのである〔⇒登録、図IV-2〕。

登録(欲望の～)【recording／仏enregistrement／独Aufzeichnung】ドゥルーズ＝ガタリ用語で欲望をなにもものに籠める(込める)こと。またそうすることでひとが欲望の発出を保留し、かつ引き出しうる状態にするとともに、社会的に流通・配分できるようにすること。ドゥルーズ＝ガタリは、欲望の発動を「生産→登録→消費」の3つの局面に分類し、それぞれのエネルギーを順に「libido→numen→voluptas」と表現している²⁵⁾。ここにリビドーは無意識から突き上げる原初のエネルギー、ヌーメンは事物に宿る靈魂のエネルギー、ヴォルプタスは消尽的な享樂のエネルギーを意味する(これらは、電気エネルギーに例えていえば、「発電→蓄電と送配電→放電」の関係に相当する)。このように欲望は何ものか

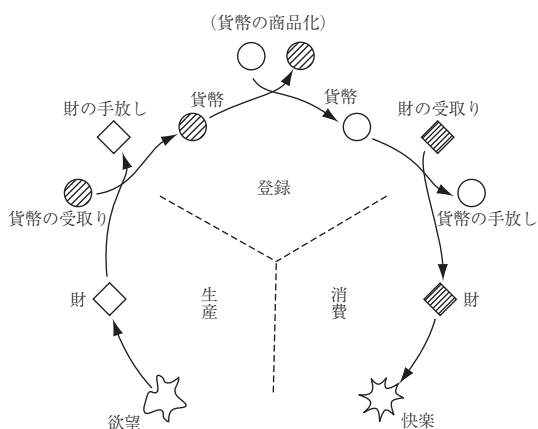
を生産し、何ものかに託し(登録し)、何ものかを消費するのである。そして欲望の登録は、個々人の欲望する生産を社会的生産のエネルギーに転換させ、そのエネルギーは社会の中を巡り、社会を動かす巨大なエネルギーとして振舞う。

経済行為に限っていえば、欲望の〈登録〉とは貨幣や財、あるいは預貯金、投資先などへの「欲望の託し」であると考えればよい〔図IV-2〕。現代の貨幣はその貨幣的実体を失って銀行口座の電子的数字と化している。ここで貨幣はまさに〈登録〉された欲望にほかならない。また現代世界には諸国通貨間には為替相場の網目が張り巡らされ、日々変動しているが、これらは集合的欲望による諸貨幣への「登録」(欲望の託し)をめぐる争いなのだと行って過言でない。

なおヒトはまた、貨幣のみならず、権力や名声などにも欲望を託そうとする。これらもすべて欲望の〈登録〉である。

預貯金【savings／deposit】欲望の登録形態のひとつ。貨幣的欲望は、「何が欲しいかわからない」ゆえに、とりあえず貯えられる。それを社会的に登録し保管する役割が預貯金である。もともと、ひとびとの貨幣的欲望の一時的な貯えにすぎなかったが、それがやがて集積して未分化で巨大な社会的欲望の自由な集合体(無器官体、資本の充実身体)と化し、主客が逆転してひとびとを動かしみずからのために働かせるに至る。このような巨大な貨幣的欲望の集合体はしばしば資本と呼ばれるが、こうなったとき、資本家すら資本の係員と化す。

価値【value／仏valeur／独Wert／希axia²⁶⁾】〔欲望論的定義〕「欲望の対象」の位置に置かれたもののこと。いわゆる「ハーバード価値プロジェ



図IV-2 経済行為における生産、登録、消費

25) AO, p. 23、市倉訳30頁。

26) αξία. 派生語にaxiology (価値論)。

クト²⁷⁾」で中心的役割を果たしたクラックホーン (Clyde Kluckhohn) は、「価値」を端的に “the desirable” と表現した²⁸⁾。これはつまり、価値とは「欲望さるべきもの」ということである。またジンメル (Georg Simmel) は「価値は決して事物の『性質』ではなく、事物についての主観のうちにとどまっている判断である」と言う²⁹⁾。ジンメルのいう価値すなわち「事物についての主観」とは、本欲望論がいう〈欲望〉のことである。つまり価値の本源は主観的欲望であり、事物の客観的性質ではない。とはいえ、もちろんひとびとの主観的欲望が社会的に収束一致し客観化ないし主観化してゆくことはありうるし、実はこのことこそが「社会化」の欲望論的意義なのである(⇒主観的貨幣、客観的貨幣)。

〔意義〕上記したように、本欲望論において、「価値」の概念は欲望から派生する副次概念で、独立の概念とは認められない。換言すると伝統的な価値(や効用)の概念は欲望概念によって書き直されねばならない。たとえば価値形態論(マルクス主義)やn財効用極大化モデル(新古典派)は価値や効用を主体の欲望の外に想定し、事物の客体的性質としている。欲望論はこれを認めない。欲望論はこの点でそれらと決定的に相違する。

交換価値と使用価値【value in exchange vs. value in use / 独Austausch-Gebrauchswert】欲望の対象に置かれるもの、すなわち**価値**は、条件によって交換価値(手段価値; 貨幣など)になる場合と使用価値(目的価値; 商品など)になる場合とがある。交換価値とは「これを用いて、何かほかのものが欲しい」ゆえの抽象的欲

望の対象であり、使用価値とは「あれが欲しい」という具体的欲求の対象である。この意味で交換価値は「欲望価値」と、また使用価値は「欲求価値」というる。

貨幣【money / 仏monnaie / 独Geld / 希nomisma³⁰⁾】①〔欲望の登録媒体としての貨幣〕ヒトは「何かが欲しい、しかし何が欲しいか分からない」という未分化な心的エネルギー、すなわち**欲望**をもつ。この欲望のゆえにこそヒトは貨幣を欲望し、貨幣に欲望を籠め(登録)、これを介して「何か」を求めようとする。つまり貨幣は欲望の対象であり、かつ欲望の手段である(欲求の対象や手段ではない)。このような貨幣は経済行為において欲望のエネルギーを担う主要な媒体となる。こうして貨幣は自然や人間関係に介入し、欲望の媒体として欲望を対象に向け、対象を商品として得ようとする(商品化)。この意味からして貨幣は決して商品から生じるのではない。むしろ逆に、貨幣がまず欲望の媒体として析出し、しかるのちに貨幣が商品をつくる(財・サービスを商品化する)のである。つまり「欲望→貨幣→商品」の順に作動する。ここに「欲望→貨幣」の関係においては、貨幣は欲望の客体であるが、「貨幣→商品」の関係においては、貨幣は欲望の代理主体である。これによって、本来欲望の主体であるヒトを、貨幣が客体として商品化し疎外する、という逆転現象が生じる。

②〔最高位の交換価値としての貨幣〕一般に、貨幣は使用価値をもたぬ交換価値(手段価値)である(⇒交換価値と使用価値)。しかしひとつの社会において交換価値は複数個が同時に存

27) 1949年から1955年にかけて、社会科学を中心に「価値」をめぐる行われた大規模な学際共同研究で、正式には「五つの文化における価値の比較研究」プロジェクト。パーソンズやシルズらを含む参加者たちはその後のアメリカ社会科学界で活躍し、大きな影響をもった。丸山哲央『文化のグローバル化』ミネルヴァ書房、2010年、68頁。

28) パーソンズ&シルズ編(永井道雄・作田啓一・橋本真訳)『行為の綜合理論をめざして』日本評論新社、1960年。
丸山哲央『文化のグローバル化』ミネルヴァ書房、2010年、64頁以下。

29) G. ジンメル(居安正訳)『貨幣の哲学』白水社、1999年、20頁。

在しうるし、自己にとっての交換価値が他者にとっての使用価値である場合もある(⇒主観的貨幣と客観的貨幣)。そこで、交換価値のうちで他の交換価値を凌駕し特に最高の流動性(未分化性、選択権)を獲得したものをその時代・その社会における貨幣ということが多い。逆に、この意味での最高位の貨幣は、他のいかなる交換価値をも商品化しうる(⇒貨幣による貨幣の商品化)。

選択権、選択能【option, selectivity】貨幣の本質的特性を表現する、安富歩の用語³¹⁾。貨幣が貨幣としての十全たる機能をはたすためには、さまざまな商品を選択し購買できる社会的権利、すなわち**選択権**(=選択能)をもたねばならない。換言すると、社会の側には多種多彩な商品が供され貨幣による選択が保証されていなければならない(**商品多様性**)。逆に、選択権の限られた貨幣は、貨幣としての十全たる機能を果たしえない(例；モノカルチュア経済における貨幣、モノ不足の社会主義社会)。安富歩によれば、貨幣とは本質においてこのような「**選択権の束**」にほかならない。

なお安富歩のいう「**選択権**」の概念は、**本欲望論**における〈**欲望の未分化性**〉の概念と相同である。未分化であるからこそ、貨幣的欲望はさまざまな対象(商品)に分化(交換)することができ、このことはさまざまな対象を選択できることをあらわしているからである。

権力、力【power】①〔自然科学〕パワーとは、エネルギー論一般の観点からは、〈仕事率〉のこと(単位；ワットW)。エネルギーの時間効率をいう概念。

②〔欲望論〕欲望論的社会理論の観点からは、個々の欲望が系統的に組み合わせられ、全体として大きな出力となったもの。欲望はこの権力により力づくで欲望を遂行する。この欲望の「組み合わせ」を**権力装置**ないし**権力機械**という。また、権力装置が特定の人格によって体现されているとき、これを**権力者**という。このように欲望論において、権力論は貨幣論と並ぶ重要な分野を形成する³²⁾。

権力はしばしば暴力を行使しそれを正当化する仕組みをもつ。この仕組みが政治過程である。政治によって正当化された権力を**政権**と呼ぶ。政治学の主要な研究対象となる概念。

権力は、公権力のみならず会社組織や組合、あるいは暴力団やマフィアといった闇の組織など、およそ組織と呼ばれるものには存在する。これが私的権力である。

交換手段・支払手段【独Tauschmittel / Zahlungsmittel】M. ウェーバー(Max Weber)の分類による貨幣の2つの機能。ウェーバーによれば、交換手段とは、「交換の際『再びそれと引き換えに財が獲得できると期待して間違いない』との根拠のもとづいて典型的に受け取る対象」である。これに対し、支払手段とは単なる「債務遂行手段」であって、納税、身代金、上納金などがこれに属する³³⁾。一般に、交換手段は対等な二者の関係にあり、支払手段は**権力的**上下関係にある二者の関係にある。この両者は無条件に一致するわけではなく、ウェーバーは、この2つの機能のうち、〈支払手段〉としての機能の方が〈交換手段〉としてのそれよりも歴史的に古いという³⁴⁾。そして十全な貨

30) νομισμα. 派生語にnumismatics (貨幣学)。

31) 安富歩『貨幣の複雑性』創文社、2000年、33頁以下。

32) ドゥルーズ＝ガタリは、人類の社会体(socius)としての進展を「原始土地機械→専制君主機械→資本主義機械」ととらえている(AO, 第3章)。このうち、専制君主機械は権力の欲望を、

資本主義機械は貨幣の欲望を、それぞれ体现している。

33) M. ウェーバー(黒正巖・青山秀夫訳)『一般社会経済史要論』岩波書店、1954年、上巻、本文12-13頁。

34) 同上・下巻、70頁。

幣とは、支払手段にしてかつ交換手段であり、しかも名目価値にもとづいて計算可能な対象である³⁵⁾。

主観的貨幣【subjective money】 個人的貨幣ともいう。財の物々交換の場合、同一の財が自己にとってと他者にとってと異なる含意をもって表れる。物々交換において、手放す財は、それが何であれ自己にとって**交換価値**（手段価値）であり、その意味で**貨幣**である（この財を手放して「何かほかのもの」が欲しい）。このような財を主観的貨幣という。他方、受け取る財は、主観的貨幣によって入手される主観的商品である。この関係は交換相手にとっても、財を入れ替えた形で同様に成り立つ。こうして、「貨幣が商品化する」という基本命題が互いにとって成立する³⁶⁾。たとえばパン屋にとってのパン、靴屋にとっての靴は、本人にとってそれが必要な使用価値ではなく、「何かほかのものが欲しい」ゆえに生産された交換価値にすぎない（このような生産を**欲望する生産**という）。このパンと靴が交換されたとき、パン屋にとってのパン、靴屋にとっての靴は主観的貨幣である。またパン屋にとっての靴、靴屋にとってのパンは主観的商品である。

客観的貨幣【objective money】 社会的貨幣、ないし単に貨幣ともいう。主観的貨幣は、それぞれの経済主体ごとに異なる実体をもっている。ところが、かかる主観的貨幣が社会的に洗練され、すべての成員が共通に認める共通貨幣になったとき、これを客観的貨幣という（たとえば金銀本位制における金や銀）。つまり、貨幣の発生は「商品→貨幣」の順ではなく「主観的貨幣（個人

的貨幣）→客観的貨幣（社会的貨幣）」の順である。客観的貨幣が成立すると、もはや、それとの交換で自己が手放す財は社会にとっての客観的商品となる。自身の財が客観的貨幣によって客観化・商品化されるからである。パン屋がパンを貨幣と交換するとき、このパンは社会的に「客観的商品」である。ただしこのときも、自己の手放す財が、当人にとって「交換価値」であることに変わりはない。したがって当人にとって「主観的貨幣」であることには変わりがない。当事者にとって貨幣の入手（売り）とは、依然として主観的貨幣による客観的貨幣の「買い」であり「商品化」なのである（⇒**貨幣による貨幣の商品化、売りと買い**）。この違いは、視点を個人に置くか社会に置くかの視点の相違にすぎない。社会科学では視点を社会一般の側に置く。それゆえに客観的貨幣が貨幣一般となるのである。

代用貨幣【token】 ①〔互酬の媒体〕貨幣を価値として信用するのではなく、相手の人格を信用してなされるようなやりとりにおいて、その人格的信用を示すために用いられる仮の媒体。たとえば貨幣経済の衰退した西洋中世の修道院共同体においては、鉛で作られた代用貨幣が用いられていた。そして修道士がたとえば聖書の写本など、決められた仕事を果たすと上位聖職者から鉛の代用貨幣が与えられ、これを別の場所へ持っていくとたとえば食料品や衣料品・日用品等の物品を入手できた。この一連の関係を外から見ると、修道士は「労働の対価として貨幣の報酬を得、その貨幣で日用品を購入した」ように見える。だがここで重要なのは、物品を供した

35) 同上・上巻、12頁。

36) このことは、「外貨の交換」という経済行為のケースで見るとはっきりする。たとえば日本人である「私」がアメリカ人である「先方」との間で日本円と米ドルを交換するとしよう。このとき「私」にとって日本円は貨幣であり米ドルは日本円によって買われる商品である。だが「先方」にとっては

米ドルの方が貨幣であり、日本円は米ドルで買われる商品なのである。

37) I. ウォーラスティン（川北稔訳）『史的システムとしての資本主義』岩波書店、1985年、54頁に記された原著者から邦訳者への私信を参照。

38) 安富歩は、そのような商品の多様性を測定する尺度として、「商品エントロピー」という概念を提案している。

者は貨幣を信用したゆえにではなく、修道士を「共同体の定めを果たした者」として信用したゆえにそうしたのだということである。誰も鉛の貨幣それ自体に価値を認めてはいない。この意味での代用貨幣は商品交換の媒体（すなわち欲望の媒体）ではなく、互酬の媒体なのである。今日の「地域通貨」も実はこの種の社会現象であり、決して新しい試みではない。

- ②〔欲望の代用媒体〕貨幣はいわば欲望の描く幻想であるから、幻滅や抑圧によって貨幣の貨幣性（信用、選択能etc.）が失われることがある。ハイパーインフレやヤミ市の発達した社会主義はそのような事態であるが、その場合でも、ひとつとは物々交換の原始的経済へ逆戻りしはしない。何らかの形で別の貨幣（交換価値）を作り上げ、これを用いようとする。欲望のゆえである。このような代用貨幣としては、歴史的にタバコや塩などがよく用いられた。こうした代用貨幣は①にいう互酬の媒体ではなく、れっきとした欲望の代用媒体である。

商品化【commodification】貨幣のもつ本源的な作用。貨幣が人間関係を介入し、もともと商品でない対象（他者の領域にある不可侵なもの）を**商品**（自己が入手しうる可侵なもの）として扱おうとする作用。換言すると、欲望が貨幣を介して、他者の有する価値を売買の対象として取得しようとする作用³⁷⁾。商品化とは、貨幣の側からみて「貨幣で財サービスを得る営み」であるから、基本的に「買い」の作用である。つまり「それまで買えなかったものを買えるようにする」商人の営みが商品化である。そして商品化されたもの、すな

わち貨幣で買えるようになったものが商品である。バブル時代に社会問題となった「地上げ」は、土地の商品化に対抗する地主に対し、暴力に訴えてまでカネの力で強引に土地を「商品化」しようとした事例である。

このように、商品化は静的な均衡状態としてではなく、動的な変動過程としてとらえられる。そして商品化の力を受けつつ、それを社会が承認しているものが商品である。したがって商品もまた動的な過程・動的な場の中にたちあられる。なお、貨幣経済が十全に機能するためには、当該社会が「貨幣による価値の商品化」をある程度大々的に認め、選択されるに足る十分な商品群（**商品多様性**：selectables）を保証して³⁸⁾、それによって貨幣が**選択能**（selectivity）を発揮できねばならない。さもなくば貨幣が交換価値として十全に成立しない。モノ不足の社会主義経済では、不十分な商品群ゆえ貨幣に十分な選択能がなく、ために貨幣は購買力（≒選択能）を失い十全に機能しなかった（ヤミ市場の横行、コネの横行）³⁹⁾。

貨幣による商品化の力は、社会に潜在する**価値**を発掘し、商品へと開発して社会の進化発展をもたらす。逆に商品化の力が弱まった商品は商品としての衰退を免れない。それは欲望の対象から外れたことを意味し、すなわち**価値**を（欲望の対象としての地位を）失うことだからである⁴⁰⁾。いずれにしろ、商品化の力や対象は時代や場所によって大きく異なるのであって、物品がただちに価値や商品であるか否かは自明ではない。

安富歩『貨幣の複雑性』創文社、2000年、160頁。
なお安富は「選択能」ではなく「選択権」という語を用いる。

39) このような選択能（選択権）を失った貨幣は、もはや「配給切符」というに等しいものへ退化する。
盛田常夫『体制変動の経済学』新世社、1994年、82頁。

40) 1980年代、フロッピーディスクは大いなる欲望の対象であったが、2010年代の今日では商品としての

地位を追われつつある。

欲望がそこへ向かわなくなったからである。

つまりフロッピーそれ自体に固有の価値があるのではない。

その時代時代において欲望が向かった先が

価値と呼ばれるだけのことである。

いくら労働力を注いでフロッピーをつくっても、

そのことで対象が価値にはしらない。

かかる事例枚挙に暇がない。

なお貨幣による商品化は、「貨幣を持つ誰でもが購入可能となる」ことを意味し、結果その商品は「特別な人のための特別なもの」ではなく、逆に「ありきたりなもの」と観念されることになる。こうして商品化は財の「かけがえのなさ」を破壊し「せちがらいもの」に改変する作用をもつ（「一部の大切なヒト」から「誰でも彼でも」へ）。ソ連崩壊後のロシアでは、ソ連時代の階級章や勲章が土産物屋で売られていた。これらはソ連時代にはカネで手に入れることのできない「かけがえのないもの」と信じられていた。それが今では誰でもカネで手に入る「ありきたりなもの」であり、わずかなカネのために売られる「せちがらいもの」である。

この反面、社会は決して、あらゆる価値の商品化を無防備に許すものではない。奴隷や売春婦はかつて商品だったこともあるが、今日の社会常識では決して商品として認められない。のみならず愛情や友情・名誉・尊厳など、価値（欲望の対象）であっても貨幣によって購入できないモノ⁴¹⁾は多い。これらは「貨幣による商品化これを許すまじ」と社会が抵抗している価値である（この、商品化への社会的抵抗を「反商品化anti-commodification」と呼ぶ）。かけがえのなさを社会が守っているのである⁴²⁾。

商品【commodity／独Ware】 貨幣による商品化過程にあって、商品化の対象であることを当該社会が承認しているもの。具体的には貨幣（客

観的貨幣）と交換に、その所有権を移転することを社会が承認している財・サービス。商品化の過程にあるものが商品なのであるから、商品は実在概念ではなく過程概念である。商品化の力を受け続けているものが商品なのである。

また、欲望論的にいえば、商品が進化発展して貨幣になるのではない。逆である。欲望が貨幣を介して対象を商品化するのであり、貨幣によって商品化されたものが商品である。したがって商品より貨幣の方がより古くより根源的である。そして貨幣よりも欲望がより古くより根源的である。《自由な財＝商品》商品は、貨幣との交換を通じれば、誰に対しても手放され開放される（あるいは、手放され開放されねばならない）。つまり商品経済において信用されるのは相手よりも貨幣や商品である。これは、貨幣が社会的に公認された権威であることによる。この開放性を社会が承認したとき、価値は商品になり（商品化）、商品は自由な市場で一般に対して開放される。《不自由な財≠商品》逆に、特定の知人相手にしか手放されない不自由な財は商品ではない（このような関係を互酬ないし互酬経済と呼ぶ）。互酬関係とは、貨幣や商品よりも相手が信用される人間関係である。これに対し商品関係とは、相手よりも貨幣や商品が信用される人間関係である。《不完全な商品》貨幣との交換であっても、一部の資格者にしか手放されない財、公開されない財は不完全な商品である。たとえば卸売の場で

41) そのようなものこそが“priceless”である。

42) かつてオリンピックでは「アマチュアリズム」がかけがえのない精神とされた。スポーツをカネで売買する行為が嫌われたのである。冬季札幌五輪（1972）において、時のIOC会長ブランデー（Avery Brundage；会長位1952-1972）が、スポーツメーカーから金銭を得ていたアルペン選手シュランツ（Karl Schranz；奥）を「アマチュア精神に反する」として五輪の場から追放したのはその象徴である（反商品化）。

当時のこの気分は、冬季グルノーブル五輪（1968）の記録映画『白い恋人たち』に描かれた女子フィギュア選手フレミング（Peggy Fleming；米）への冷やかなナレーションにおいても知ることができる。その後、モントリオール五輪（1976）が財政的に破綻しオリンピックが立ち行かなくなると、その後のIOC会長サマランチ（Juan Antonio Samaranch；会長位1980-2001）は財政健全化の名のもと、ロス五輪（1984）において組織委員長ユベロス（Peter V. Ueberroth）とともにオリンピックの商品化を断行した。今やオリンピックは商品となり、

扱われる財は、不完全な商品（前商品pre-commodity）である。一般に開放されていないからである。

互酬【reciprocity】 特定の知人のみを信用しこれを相手として財を交換する関係を「互酬」という（Karl Polanyi）。未開社会における財の授受関係は多くの場合この形をとる。この関係は、外見上「交換」と同じに見えても、商品交換の関係ではない。商品関係とは、相手よりも貨幣や商品が信用される関係である。これに対し互酬関係とは、貨幣や商品よりも相手が信用される関係なのである。ウォーラスティン（Immanuel Wallerstein）は、この互酬原理にもとづいて編制される社会システムを「ミニシステム」と命名した⁴³⁾。

新商品【brand-new commodity】 欲望が新奇に開拓し、新奇に貨幣的欲望による購入が可能となった商品。新商品の開発や購入は欲望の作用である（欲求の作用ではない）。それは事前に満足（効用）を知りえないから、購入してはじめて知りうる新奇なものだから、である。新商品の購入はしたがって、正の感情（愉悦）のほかにはしばしば負の感情（後悔）をとまう。

貨幣による貨幣の商品化【commodification of money by money】 貨幣との交換によって所有権が移譲される対象を一般に商品といい、貨幣が商品を作る買いの作用を商品化というが、貨幣は一般の財サービスのみならず貨幣自身をも

商品化する。ただしその場合でも「貨幣aが貨幣bを商品化する」（貨幣aで貨幣bを買う）という場合に、aとbとは厳密には異なっている。たとえば現在の貨幣aで将来の貨幣bを買う場合（預金、投資など）や、逆に現在の貨幣bを将来の貨幣aで買う場合（借金、資金調達など）、自国の貨幣aで他国の貨幣bを買う場合（両替、外為など）、近くの貨幣aで遠くの貨幣bを買う場合（送金など）など、さまざまなケースがある。貨幣によって商品化された貨幣を、特に金融商品という。

売りと買い【sell and buy】 商品を手放して貨幣を入手する行為を「売り」といい、逆に貨幣を手放して商品を手放して商品を入手する行為を「買い」という。対等な物々交換には売りと買いの客観的な区別はない。貨幣を媒介としてはじめて売りと買いの客観的な区別が現れるのである⁴⁴⁾。

なお、貨幣による売買の連鎖は商人機械のリゾームとなって長く伸長し接続しあうことが多い（⇒線型の系列）。この場合、大きく見れば貨幣的上流の側が買いとなり、貨幣的下流の側が売りとなる。つまり上流は買い続け、下流は売り続ける。しかも貨幣は基本的に社会的な幻想であるから、上流は社会的幻想を手放し続け、下流は社会的幻想を受取り続ける。こうして事実上、買いの側が搾取の欲望の大きな主体（中核）となり、売りの側が搾取の欲望の大きな対象（周辺）となって固定化する（⇒中核と周辺）。しかも、この流れは最上流の中核において大きく東

「コマーシャリズム」の象徴となっている。
聖火リレーへの参加も、もはや崇高なものではなく、
カネで手に入るありきたりのものであり、
ロンドン五輪（2012）では聖火リレーで購入したトーチを
売買する行為が問題になった。
なお、ユベロスが構築したオリンピックの
基本的なビジネスモデルは
TOP（The Olympic Program）と呼ばれ、
オリンピックのさまざまな利権
（たとえばオリンピックのマークを協賛社として
使用できるなど）を一業種一社に限って切り売りすることを
基本とし、IOCの大きな事業になっている。

かつて広告会社に勤務していた筆者は、
その詳細についてつぶさに体験した。

43) I. Wallerstein, *The Capitalist World-Economy*.
Cambridge Univ. Press, 1979, p. 5.

44) M. ウェーバー『一般社会経済史要論』岩波書店、
1954年、上巻、本文14頁。
だがもちろん、物々交換にも「主観的な」売買の区別は
存在する。互いに自財（貨幣）を手放し、
他者の財（商品）を手に入れているので、
これは基本的に両者とも「買い」である。

ねられる。こうして大きな欲望の社会的主体を形成する段階が、ドゥルーズ＝ガタリのいう独身機械(連接)と呼ばれる総合の段階である。

商人[merchant] ①〔広義〕商品化の主体。すなわち貨幣を用いて商品を手に入れようとする人、あるいは組織あるいは代理人。商人は財やサービスを、あるいは貨幣すらをも商品化し、それらを商品として開拓し社会にもたらす。その意味で資本家は典型的な商人である。商人の出現は商品や市場の出現よりも一般に古い。

②〔狭義〕①でいう商品化の主体のうち、とりわけ、貨幣によって入手された商品を貨幣によって手放そうとする主体。通例この意味での主体を商人という。

《商人の社会的意義》商人は、商品化を通じて売りの主体と買いの主体とをつなぐ(接続する)機能を果たし、これによって社会の中に連鎖的な結合(これがリゾームの性質を示す)をもたらす。この結合体を**商人機械**と呼ぶ。

《資本家》資本家はまとまった貨幣を動かし、投下する判断の主体であり、商品化の主体である。それゆえ**資本家は典型的な商人である**。

《商人と権力》**権力**とは、個々の欲望を組み合わせ全体として大きな出力をおこなう欲望の巨大化機構であるとともに、この機構を通じて巨大化する欲望である。つまり権力は貨幣とは別の形で「何かが欲しい」という欲望を暴力的に遂行する社会的手段である。商人と権力者は手段こそ異なれ、欲望の遂行という無意識の動機を共有するため、歴史的にしばしば結託した(政権と政商)。むしろそれが歴史の常態であり、不正の観点からそれが批判されるに至ったのは近代の意識の産物である。(⇒**重商主義**)

《交易と略奪、戦争と平和》海賊は多くの場合商人でもある。暴力的な略奪か、あるいは平和的な交易か(海賊か商人か)は、状況(有利か不利か)によって入れ替わる、商人のゲーム論的互換戦略にすぎない。敵対的略奪は欲望の権力的発出であり、平和的な交易は欲望の貨幣的発出ともいえる。逆に交易は平和の証であり、ただ平和の確認のために交易それ自体が重視される(財は何でもよい)ことも多い。たとえば国際法上では、戦争後に通商条約が締結されれば戦時から平時に戻ったものと解釈される。ことほど交易(経済)と平和(政治)、略奪(経済)と戦争(政治)は直結しているのである。

V | リゾーム・機械・商人機械

リゾーム[rhizome] ポスト構造主義者ドゥルーズ＝ガタリが社会や生命のシステムを構造分析するために援用する概念⁴⁵⁾。構造主義的な「リジッドな構造」に対して、ポスト構造主義的な「ロバストな構造」を表現する、典型的な概念。

《原義》リゾームの原義は「根茎」ないし「地下茎」で、「樹木(tree)」の対概念である。ツリー(=樹木)が幹・枝・葉・根・…etc…という具合に整然と分化した階層関係(上位-下位)や相互の固定的位置関係、役割分担関係、等々、を築くのに対して、リゾーム(=根茎)はそういった固定的な位置関係性や分化した役割関係性を持たない。むしろリゾームはそういった静的な関係性が分化する以前の、未分化な動的運動性に着目する概念である。リゾームはいわば蓮根や竹の地下茎のように自在に伸長する縦横無尽さ、また伸長した先で幹や枝葉・根などを分化

45) MP, 第1章。豊崎光一訳『リゾーム』朝日出版社、1987年。市川 浩「〈身〉の構造」市川 浩・坂部恵編『人称的世界』弘文堂、1978年。
河合隼雄「無意識の科学」岩波講座『精神の科学1・精神の科学とは』岩波書店、1983年、特に241頁以下。

できる未分化性、流動的性格、等々を特徴とし、その運動には必然性もなく一見支離滅裂に見えるが、そのことが却って硬直を逃れた創造的な結果をもたらしことも多い。

《今日の意義》リゾームは今日、「根茎」の原義を離れ、拡張・発展して、ある種の抽象的な概念や思考法をあらわすに至っている。〈ツリー〉も具体的「樹木」のイメージを離れて「樹状図」「系統樹」等に代表される抽象的〈構造〉をあらわすようになっているが、〈リゾーム〉もまた具体的「根茎」のイメージを離れて縦横無尽に伸長し絡み合い、しかも不断に変動する抽象的「流動体」「接続体」をあらわす。こうしてリゾームは、堅牢堅固な（リジッドな）関係・構造を見ようとする「構造主義」を超え、したたかで強靱な（ロバストな）関係・構造を見ようとする概念ないし視座となつて、「ポスト構造主義」の主要概念のひとつに数えられる。

《欲望論との関係》本欲望論においては、上記ドゥルーズ＝ガタリ概念提起を受け、リゾームを独自に再解釈・発展させて用いる。まず社会的運動体としてのリゾームのエネルギー的根拠をひとつの欲望におく。ドゥルーズ＝ガタリはリゾームの集散的・社会的綜合様式を離接・接続・連接の3類型（3段階）に分類したが、それぞれの綜合を生成・維持する局面として析出・凝集・分離／伸張・接触・接続／取捨選択・／…等々の各局面が指摘しうる⁴⁶⁾。動物の神経系の形成や血管網の形成、あるいは社会の中での商人の販路網の形成はリゾームの典型的な発現形態として理解しうる。

機械【machine】(opp. 道具) ①〔工学〕部品と部品とが系統的に結合され、作動する結合体。力学

的エネルギー、電氣的エネルギー等を作動の原動力とする。

②〔文明論〕文明史家ルイス・マンフォード(Lewis Mumford)の用語⁴⁷⁾。彼は、機械一般の中でも人間を部品とし、人間と人間とが結びついて形成される見えない機械、すなわち「社会機械」を「最古の機械」と考えた。この社会機械が文明的スケールまで巨大化した社会的結合体が、彼のいうメガマシンである。

③〔生物・社会〕生物のシステムは、生化学的諸分子をその部品としているので、〈分子機械〉である。生化学ではこの分子機械を〈化学機械〉、すなわち「化学エネルギーを原動力としそれを授受伝達しつつ作動する機械」ととらえる。この認識を範としたドゥルーズ＝ガタリは、人間社会のシステム(マンフォードのいう〈社会機械〉)を〈欲望機械〉、すなわち「欲望エネルギーを原動力としそれを授受伝達しつつ作動する機械」ととらえた。

化学機械【chemical machine】〔生化学〕化学エネルギーを原動力として作動する機械(⇒機械③)。生化学機械。類義語として、分子機械、カスケード機械、酵素機械などがある。いずれも生命のしくみを化学分子間の反応からなる「機械」として表現している。

分子機械【molecular machine】〔生化学〕化学分子を部品として編制される機械(⇒機械③)。また、その編制がモル的に(ランダム的に)ではなく分子的に(高分子的に)あるいはカスケード的になされていることを強調する概念でもある。

欲望機械【the desiring machine／仏des machines désirantes】欲望エネルギーを原動力として作動する、諸器官の系統的な結合体(機械)をさす

46) 拙著『欲望するシステム』ミネルヴァ書房、2009年、第11章を参照。

47) L. マンフォード(樋口清訳)『機械の神話』河出書房新社、1971年。

ドゥルーズ＝ガタリの用語。逆にいえば、社会のシステムは、基本的に欲望機械として編制される。化学エネルギーを原動力として作動する**化学機械**(=生命のシステム)に類比される概念。邦語ではしばしば「欲望する諸機械」とも記述される。(⇒**欲望、機械**)

社会のシステムにおけるその実体は、欲望するひとびとが相互に結びつきあって形成する**社会機械**のことである。(比較⇒**商人機械**)

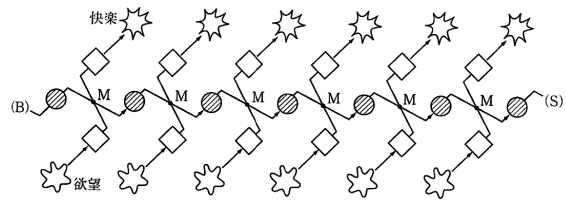
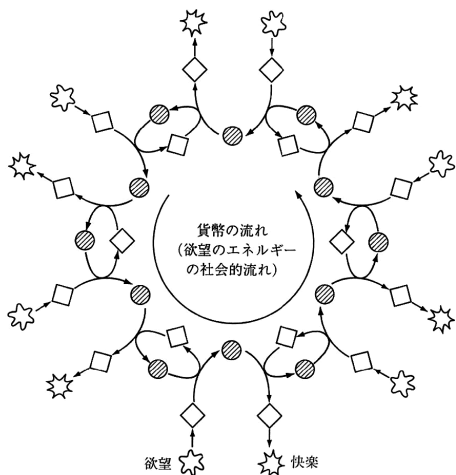
欲望する諸機械 ⇒ 欲望機械

メガマシン【megamachine】ひとひとが結びついて成立した社会的な巨大機械をいう、ルイス・マンフォードの用語(⇒**機械②**)。

商人機械【merchant machine】商人をその主要部品として連結・構成される欲望機械。具体的・

典型的には、商人同士の結合から構成される「**販路網**」「**決済網**」がそれにあたる。販路網・決済網は典型的に**リゾーム**の性質を示す。(⇒**資本主義機械**)

線型的系列 (リゾームの～)【unidirectional linear series / 仏la série linéaire】リゾームの伸長状態を形容するドゥルーズ＝ガタリの用語。*AO*の訳者市倉宏祐は「単系的線型状系列」と訳す。欲望と欲望とが接続して形成されるリゾームの細長い連鎖が、回帰的円環的に並ぶことなく一方向的に伸び、欲望がそのまま通過し流れ去っていくような構造形態。線形状に接続した欲望は、上流から下流に向けて次第に**選択能**を失っていく(分化してゆく)傾向をもつ。資本主義世界システムでは、中核から周辺に向かって



(図の出所: 黒石 晋『欲望するシステム』ミネルヴァ書房、2009年、127頁および238頁)

図V-1 貨幣(●)と財(◇)をめぐるリゾームの円環的系列(左)と線型的系列(右)

販路のリゾーム（商品連鎖）が放射状に単系的線型状系列をなしていると考えられ、下流に相当する周辺部では、貧相な選択肢（意思決定肢）しか残余しなくなる。これが周辺にしばしばみられるモノカルチュアという残余形態である。

円環的系列（リゾームの～）【recursive circular series／仏la série circulaire】または回帰的円環状系列。上記線型的系列と対をなすものとして本欲望論において新たに提案される概念。欲望と欲望とが接続して形成されるリゾームの細長い連鎖が円環状に閉じ、全体としてマクロの欲望が自己回帰的に作動するような構造形態。この回帰的構造に欲望が備給されると、欲望は自己増幅的に連鎖反応して大きなエネルギーを発生させる。こうして回帰的円環状系列をなすリゾームは大きな欲望のエネルギーのもと新奇な行動や発明を繰り返し、新奇な商品化をおこない、また多量の欲望を発散させつつ蓄積してゆく。資本主義世界システムでは、その中核部にこのような構造が形成されていると考えられる（⇒中核と周辺）。

資本主義機械【capitalist machine】**商人機械**のうち、その**接続**における中枢部が「貨幣が貨幣を生む」連鎖反応の臨界の段階に達した商人機械。それは単に貨幣が貨幣を生むのみならず、商品が商品を生み、発明が発明を生み、情報が情報を生み、…、欲望が欲望を生むような「自己増幅的」な状態にあり、それが勝手にすすんでゆく。そのような特別な社会状態（臨界状態）は、社会的欲望が十分に濃縮された条件ではじめて実現され、商人たちが形成する欲望のリゾームが高濃度に（回帰的）円環状系列をなすことによって構造化される。なかでも18世紀半ばの

イギリスに始まった産業革命は、「発明が発明を生む」「産業が産業を生む」「貨幣が貨幣を生む」…「新奇が新奇を生む」…という象徴的な社会現象であり、資本主義機械の作動の開始を典型的に示すものである。

なお、資本主義機械は頭書したように商人機械の一種であることを忘れてはならない。

重商主義機械【mercantilist machine】政権と政商との結託による、権力機械と商人機械との社会的共生体。前近代にあつては、商人は投資先として権力を、権力は国庫の源として商人を重用した⁴⁸⁾。西洋史上の封建的分権体制から中央集権化への移行は、この両者の結託によってもたらされたものである⁴⁹⁾。中世後半に始まったこの結託・共生が最高潮に達したのが近代前夜の重商主義機械である。重商主義時代と絶対王権時代とが一致しているのは偶然ではない。

重商主義と産業主義【mercantilism and industrialism】〈重商主義〉とはもともと「富（価値）の源泉は商業活動にある」という中心教義（central dogma）を信奉する思想（イズム）のことである〔＝原義〕。商業によって外から価値をもてくることが、すなわち致富をもたらすという考え方といえる。特にその価値が金銀といった貴金属に向けられているとき、この重商主義を重金主義という。さらには、上記の教義に基づいて商業活動を国家の後ろ盾によって有利に推進しようとする商人（政商）の戦略、ないし政権が商業活動に介入し致富を遂げようとする国家の政策を特に重商主義といふことが多い〔＝狭義の重商主義〕。西欧諸国がこぞって設立した「東インド会社」「アフリカ会社」「西インド会社」「南海会社」などの国策商社が17世紀初頭に始

48) 近代に至ると、商人の投資先は王権よりもむしろ産業に向かった。これが絶対王権の衰退と市民層の成長をもたらした。

49) 英仏百年戦争期は封建的な分権体制から中央集権体制への移行期に当たっているが、

このとき英・仏の王権に投資していたのは（少なくとも初期においては）フィレンツェ商人である。こうして王権による俸給官僚制と傭兵軍の整備が進展した。またジェノヴァ商人は西・葡の王権に投資しレコンキスタと大航海時代をもたらした。

まることから、これをもって重商主義時代の幕開けとするのが歴史認識の常道である。だが本来、重商主義とは「富の源泉は商業活動にある」という考え方で、国家権力の介入不介入とは独立の概念である。その意味では13世紀以降のイタリア諸市による地中海貿易なども広くこの動機にもとづいている。

重商主義に対し〈産業主義〉とは「富(価値)の源泉は生産活動にある」という中心教義を信奉するイズムのことである⁵⁰⁾。両者は一見すると、富の源泉について見解が対立しているが、実のところ産業活動も商業活動の一種にほかならない。商人の欲望が王権ではなく産業に向かっただけである。その意味で産業主義は重商主義の一種なのである。

中核と周辺【core and periphery】 16世紀以降の世界システムに固定的に見られる、開発と低開発の地理的な関係をいうウォーラスティン(Immanuel Wallerstein)の概念。低開発(周辺)は未開発なのではなく開発(中核)による構造的搾取の産物である。なおウォーラスティンは中核と周辺の間「半周辺semi-periphery」という中間的カテゴリーを置き、「中核-半周辺-周辺」の三層構造で世界システムを理解する。アミン(Samir Amin)の従属論やフランク(Andre Gunder Frank)の低開発論に触発され、それらを洗練した図式である。

本欲望論の観点でいえば、中核には貨幣的欲望の集積があり、周辺には商品的欲望の集積がある。この両者は非対等で、中核には貨幣の性質に由来する**選択能**(安富歩のいう選択権)があるが、周辺にはそれがない。この結果、あたかも「中核が周辺を支配制御する」かのような

(quasi)、社会的な巨大機械(メガマシン)が出現する。目的に応じた選択肢の選択が「制御」ということだからである。これはいわばQuasi-controllerというべき非主体的な主体であって、このような巨大な主体を、ドゥルーズ=ガタリは「**独身機械**」という。

50) 「産業主義industrialism」という思想の創始はサン=シモン(Claude Henri de Rouvroy Saint-Simon, 1760-1825)に帰せられる。
富永健一『思想としての社会学』新曜社、2008年、第一章。

Susumu Kuroishi

This paper introduces a glossary of essential technical terms which are required to construct a new social theory based on human desires. The author, deeply inspired by Deleuze-Guattari's notion of desire and a longtime researcher in social systems theory, calls it here socio-systemics of desire. For example at the entry DESIRE, one of the most important of course, he defines it as an undifferentiated human psychic energy. Under DESIRE therefore any people conceive such an unconscious feeling as "I want something, but I don't know what it is". So desire often emits itself with regretful pleasure. Desire desires something unknown, produces something new and seeks something else. People also desire MONEY just only because they don't know what they desire. Thus the concept series DESIRE-EMISSION-PLEASURE shows entirely different and new aspects of social phenomena than the traditional NEED-FUL-FILLMENT-SATISFACTION.